

## イワツバメの減少化と年齢

武下雅文

イワツバメは謎の鳥である。北部九州では繁殖コロニーが冬期は越冬場となる。繁殖期に成鳥、ヒナにリングを装着した個体が、同一場で数多く捕獲されることから、これらは同一集団と考えられるが、繁殖の終了した8月上旬より12月上旬迄コロニーから姿が消えてしまう。その秋期での行方が未だに不明である。長崎県川棚町、佐賀県・福岡県の県境の山間部で少数の群れを確認したが、これが秋期の生息地かは不明である。

近年、北部九州でのイワツバメのコロニー放棄が多い。1995年より標識調査を開始した京都郡勝山町黒田橋（橋幅12m、長さ50m、川面より桁下まで3.9m）の大規模コロニー、開始時の1995年は220巣で、繁殖利用数は60%であったが、1998年以降はその利用率は20%となり、2002年8.9%、2003年4%と減少し、本年は177巣でその利用は僅か1巣だけで放棄が予測される。原因はバンダーの攪乱とも考えられる。

小倉南区北方大橋に1996年から44巣のコロニーが形成された。上流の郊外地の放棄コロニーから移動したものと考えられ、捕虫網で捕獲を試みたところ、予測通りのリカバリーがでた。しかしこの新コロニーは桁下が高く、1997年からは繁殖期終了後に巣数調査だけを実施し、標識調査は一切実施しなかったが、2002年の180巣をピークにその後減少し、本年は61巣となった。成鳥数も減少し、各コロニーでは8月上旬迄確認されていたが、本年は6月20日以降は成鳥は確認できなかった。また都市鳥研究会会誌では、標識調査を実施していない関東地区のイワツバメの減少化が紹介されている。

イワツバメの年齢であるが、巣内ヒナにリングを装着した個体の6年目の回収例が極めて多い。成鳥では1990年放鳥、1996年再捕獲の6歳+が1例あるだけで、6年目の回収例は無く、5年目回収が5例、4年目回収が非常に多いことから、イワツバメの生存期間は6年とも考えられる。

表1 イワツバメの放鳥数と再捕獲数

放鳥年	成鳥	Rt	ヒナ	Rt	放鳥年	成鳥	Rt	ヒナ	Rt
1989年	379	3	7		1998年	247	67	611	43
1990年	440	78	94	2	1999年	118	35	268	31
1991年	110	31	36	5	2000年	35	4	131	8
1992年	472	0	361	0	2001年	103	13	81	15
1993年	408	73	379	24	2002年	87	11	20	6
1994年	396	88	251	25	2003年	46	6	20	0
1995年	534	95	1022	31	2004年	58	8	0	1
1996年	104	97	918	38	計	3855	702	5737	272
1997年	418	93	1477	43					